

3月予報（全13枚）

病防第55号

令和8年（2026年）2月27日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第12号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第12号（3月予報）

I 気象予報：令和8年（2026年）2月26日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	20	30	50
	降水量	40	30	30
	日照時間	20	40	40

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	カンザワハダニ	並	やや多	並(±)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水少(+)	
カンキツ	そうか病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
	かいよう病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
	ミカンハダニ	並	やや多	やや少(-)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水少(+)	
冬春トマト	黄化葉巻病	やや多	並	黄化葉巻病 やや多 コナジラミ 並 (+)	黄化葉巻病 やや多～並 コナジラミ 並 (+)	(コナジラミ) 気温高(+)	

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春ナス	すすかび病	やや少	並	やや少(-)	並(±)	降水少(-)	
冬春 キュウリ	うどんこ病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
	べと病	やや少	並	少(-)	並(±)	降水少(-)	
ウリ科野菜	退緑黄化病 スイカ退緑え そ病	やや多	やや多	(冬春キュウ リ) 退緑黄化病 やや少(-) コナジラミ 並(±)	退緑黄化病 冬春キュウリ やや多~並 メロン, スイカ 並 コナジラミ 冬春キュウリ, メロン, スイカ 並 (±)	(コナジラミ) 気温高(+)	
イチゴ	ハダニ類	多	多	多(+)	やや多~並 (+)	気温高(+)	
	アザミウマ類	並	やや多	少(-)	並(±)	気温高(+)	
	アブラムシ類	やや多	やや多	少(-)	やや多~並 (±)	気温高(+)	
冬春果菜類	灰色かび病	並	並	冬春キュウリ, イチゴ 並 冬春トマト, 冬春ナス やや少 (±)	冬春ナス, 冬春キュウリ, イチゴ 並 冬春トマト, 並~やや少 (±)	降水少(-)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春果菜類	コナジラミ類	並	並	冬春トマト、 冬春キュウリ 並 冬春ナス、 やや少 (±)	冬春トマト、 冬春ナス、 冬春キュウリ、 メロン、 スイカ 並 (±)	気温高(+)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	冬春ナス 並 冬春キュウリ 少 (±)	冬春キュウリ やや多~並 冬春トマト、 冬春ナス、 メロン、 スイカ 並 (±)	気温高(+)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

2 予想発生量、根拠、対策等

◎茶

1) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、寄生葉率 2.0% (平年 2.0%) と平年並の発生であった (±)。

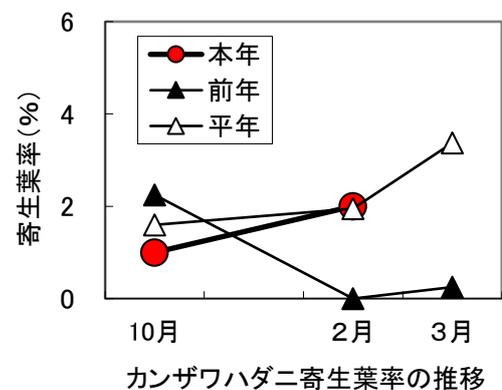
(3) 対策

ア 防除適期は平均気温が 10℃以上になる3月中旬から下旬頃となるが、今後の気象状況によっては適期が早まる可能性がある。

イ 発生状況をよく観察し、適期防除に努める。

ウ 防除にあたっては、経済許容水準 (寄生葉率 20%以下) を参考とし、薬剤が葉裏まで届くよう規定の散布量で丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎カンキツ

1) そうか病

(1) 発生量：並

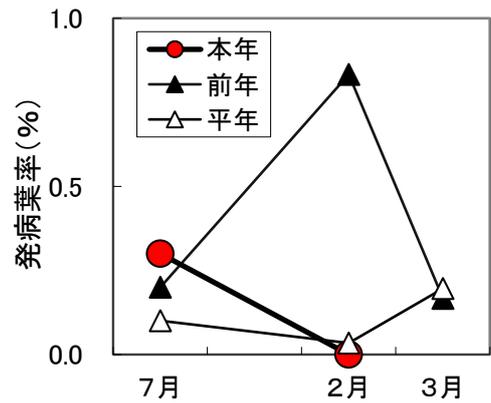
(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、発病葉が見られず（平年発病葉率 0.1%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 旧葉の病斑が伝染源となるため、前年に発生が多かった園では、初期の予防防除を徹底する。

イ 防除にあたっては、幼芽期（新芽が 5mm 以内）の防除適期を逃さないよう注意する。



そうか病発病葉率の推移

2) かいよう病

(1) 発生量：並

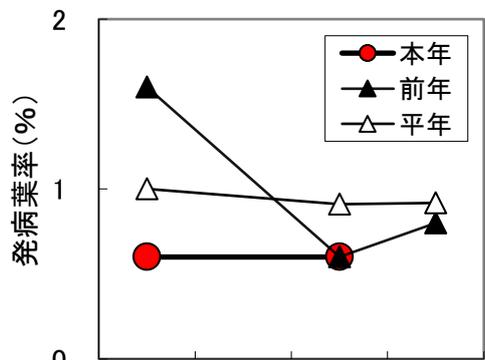
(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、発病葉率 0.6%（平年 0.9%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 伝染源は、前年に葉や枝に形成され越冬した病斑である。伝染源が多い場合は、その後の発生も多くなるので、発病した葉や枝の剪除を徹底する。

イ 通常 3月中旬以降の降雨により感染が始まるため、発芽前に薬剤防除を行う。



かいよう病発病葉率の推移

ウ 新葉の発病が多いと果実への感染も多くなるので、発芽前～5月にかけての予防防除を徹底する。

エ 銅剤はマシン油乳剤と近接散布すると効果が低下するため、14日以上間隔をあける。

3) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

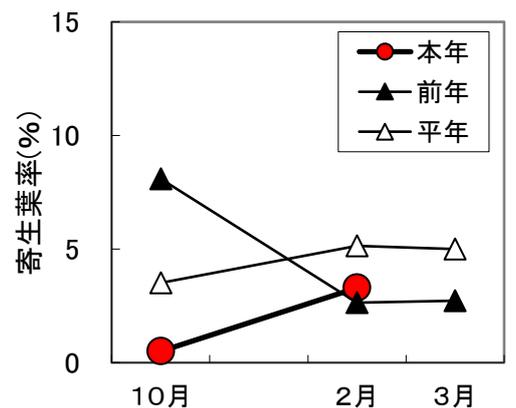
(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、寄生葉率 3.3%（平年 5.3%）、寄生頭数 0.5 頭/10 葉（1.7 頭/10 葉）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア 多発すると防除が困難になるため、発芽前にマシン油乳剤を散布し、初期密度を下げる。

イ 樹勢の弱い園や休眠期にマシン油乳剤を散布しなかったほ場では、マシン油乳剤の散布を控え、ダニ剤による防除を徹底する。



ミカンハダニの寄生葉率の推移



◎冬春トマト

1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、発病株率3.5%（平年2.7%）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 2月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率0.3%（平年0.4%）と平年並の発生であった（±）。

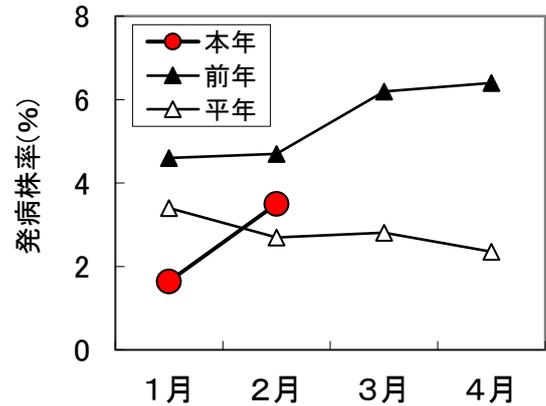
(3) 対策

ア タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設周辺及び内部の雑草はタバココナジラミの生息場所となるので定期的に除草する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

エ 防除の詳細については、令和7年12月25日付け発生予察注意報第6号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/297687.pdf>) を参考にする。



黄化葉巻病の発病株率の推移
(冬春トマト)

◎冬春ナス

1) すすかび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、発病株率15.2%（平年26.1%）と平年比やや少の発生であった（-）。

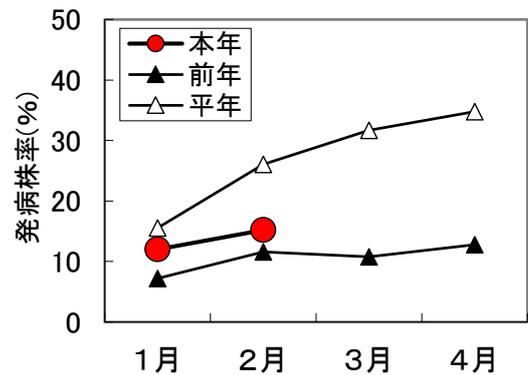
(3) 対策

ア 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すすかび病の発病株率の推移
(冬春ナス)



◎冬春キュウリ

1) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、発病葉率10.4%（平年9.6%）と平年並の発生であった（±）。

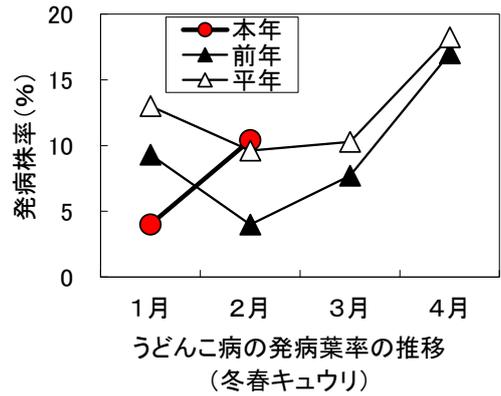
(3) 対策

ア 多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。

イ 発病葉や不要な下葉など取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ベと病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

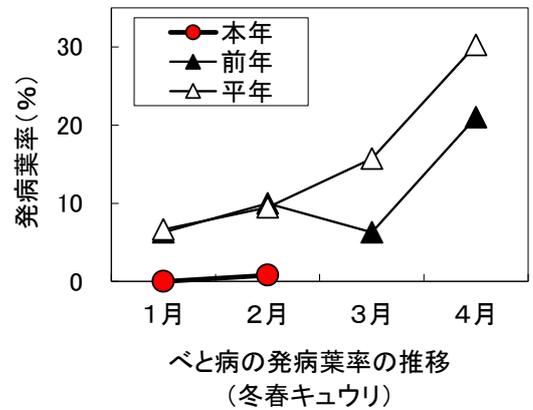
ア 2月の巡回調査では、発病葉率0.8%（平年9.5%）と平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け、肥培管理に注意する。

イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎ウリ科野菜

1) 退緑黄化病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

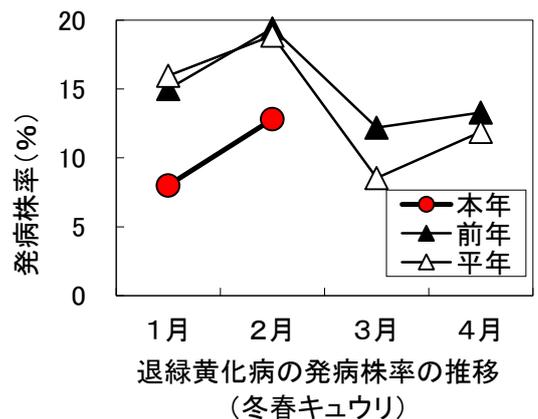
ア 2月の巡回調査では、発病株率12.8%（平年18.9%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア タバココナジラミを施設内で増やさない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設周辺及び内部の雑草はタバココナジラミの生息場所となるので定期的に除草する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



◎イチゴ

1) ハダニ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、寄生葉率21.7%（平年14.9%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 気温が上昇すると急激に増加するため、発生初期に防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴにおけるハダニ類の防除対策」を参照）。

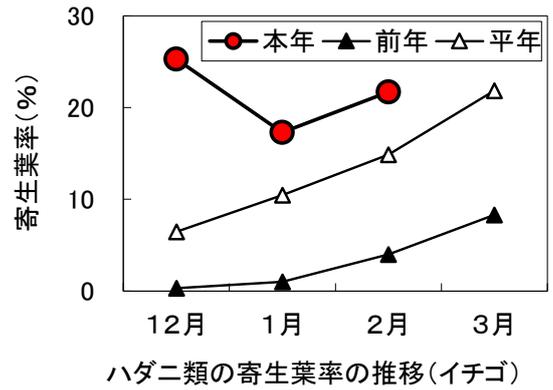
イ 寄生葉を早期に取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 薬剤防除の際、事前に下葉かぎを行い、葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ 天敵（カブリダニ類）を放飼したほ場でハダニ類が発生している場合は、天敵に影響の少ない薬剤の散布や天敵の追加放飼を行う。なお、それでも発生が多いほ場では、効果の高い殺ダニ剤を使用した上で、薬剤を主体とした防除体系に切り替える。

カ 詳細は、令和7年12月22日付発生予察注意報第5号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/297317.pdf>) を参照する。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、寄生株率5.3%（平年12.9%）と平年比少の発生であった（-）。

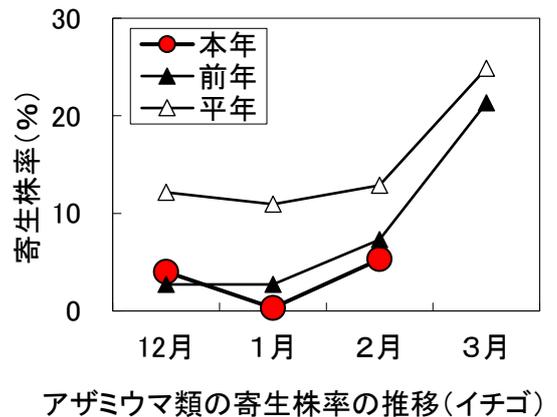
(3) 対策

ア 花を注意深く観察するとともに、粘着トラップを設置して早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。粘着トラップの色は、ヒラズハナアザミウマに対しては青色を、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、アザミウマ類の生息・場所となるので、定期的に除草する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) アブラムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

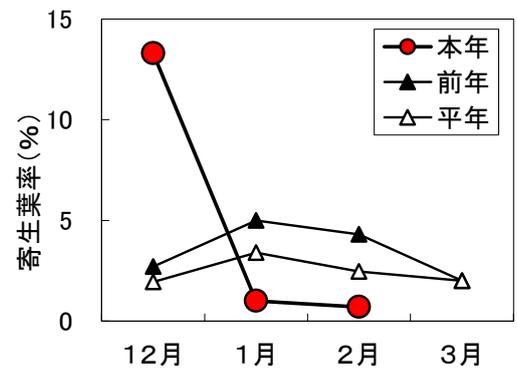
ア 2月の巡回調査では、寄生株率0.7%（平年2.5%）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 気温の上昇に伴い、有翅虫の飛来が多くなるため、施設開口部等への防虫ネット展張によりほ場内への侵入を防ぐ。

イ 多発生すると防除が困難となるため、発生に注意し、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アブラムシ類の寄生葉率の推移(イチゴ)

◎冬春果菜類

1) 灰色かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、トマトで発病は確認されず（平年 茎葉3.5%、果実0.1%）平年比やや少、ナスで発病株率1.2%（平年2.5%）平年比やや少、イチゴで果実の発病は確認されず（平年果実0.1%）平年並、キュウリで発病株率1.6%（平年1.5%）と平年並の発生であった（±）。

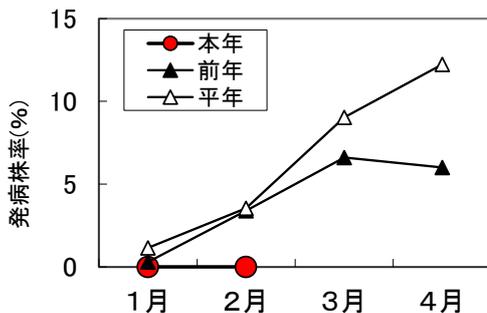
(3) 対策

ア 発病後は防除が困難なので、薬剤防除は予防に重点をおく。

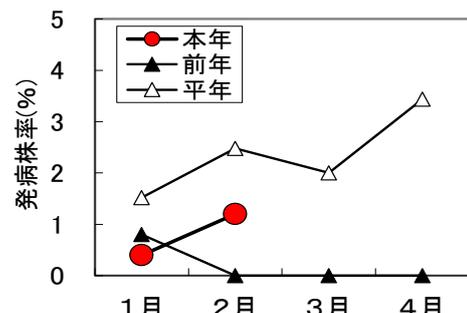
イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

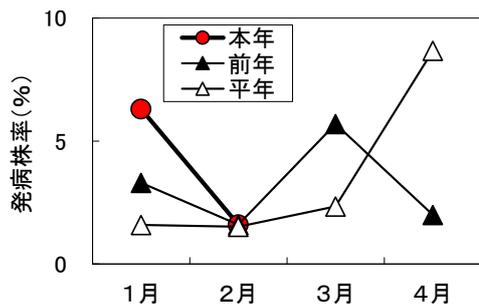
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移(冬春トマト)



灰色かび病の発病株率の推移(冬春ナス)



灰色かび病の発病株率の推移(冬春キュウリ)



2) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、トマトで寄生葉率0.3%（平年0.4%）と平年並、ナスで寄生葉率3.6%（平年5.2%）と平年比やや少、キュウリで寄生葉率4.0%（平年4.2%）と平年並の発生であった（±）。

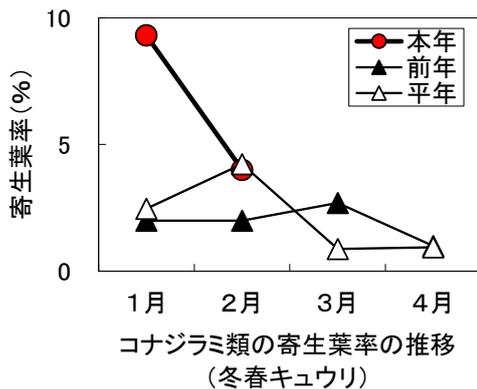
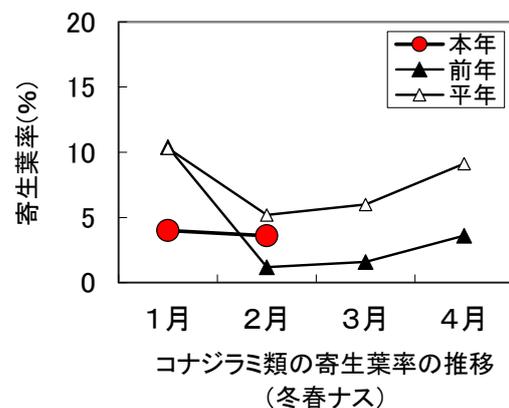
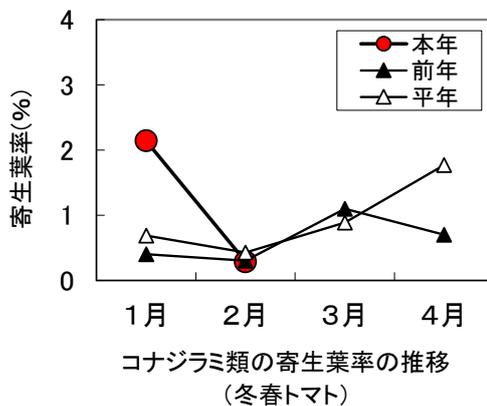
(3) 対策

ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 施設周辺及び内部の雑草はタバココナジラミの生息場所となるので定期的に除草する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。なお、薬剤の選定については、令和7年11月6日付け技術情報第9号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/294706.pdf>) を参考にする。



3) アザミウマ類 (イチゴ除く)

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 2月の巡回調査では、ナスで寄生葉率2.0% (平年1.8%) と平年並、キュウリで寄生は認められず (平年1.2%) 平年比少の発生であった (±)。

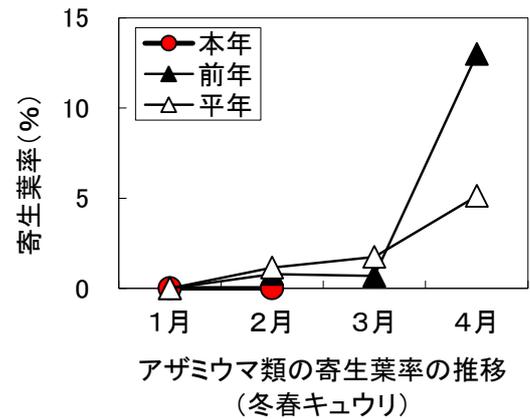
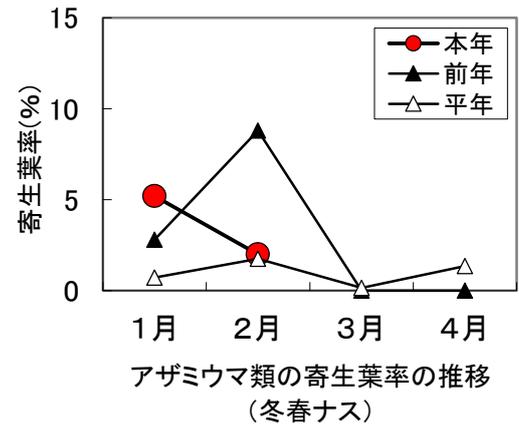
(3) 対策

ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、早期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する (3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照)。

ウ ハウス周辺及び内部の雑草は、アザミウマ類の生息・増殖場所となるので、定期的に除草する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

果樹類の春先の病虫害防除について

<カンキツ>

マルカイガラムシ類の発生が多い園では、マシン油乳剤の散布により越冬世代の防除を行いましょう。樹勢の低下などの要因からマシン油乳剤を散布しない場合は、3月中旬頃にアプロード水和剤 (IRACコード: 16) とアビオンEを混用散布しまししょう ([農業の新しい技術No. 737「ウンシュウミカンのナシマルカイガラムシはマシン油乳剤以外による越冬期防除が可能である」参照](#))。

<ナシ>

黒星病は、展葉直後から感染し始め、発病するまでの潜伏期間が14日以上あります。感染に気付かず薬剤防除が遅れると多発するため、予防散布を徹底しまししょう。特に、3月中下旬の萌芽初期ならびに3月下旬から4月上旬の開花期は、最も重要な防除時期となるため、薬剤を散布するタイミングを逃さないよう注意しまししょう。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病原ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になるため、今後、ウイルスを持った虫（保毒虫）が施設外に拡散することによってウイルス病の発生が増加することが懸念されます。そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の2つの対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 施設内に粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。また、コナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う。
- (2) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。
- (3) 発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。
- (4) ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

2 保毒虫を施設外に「出さない」対策

地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、施設内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

- (1) 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無いか点検し、必要に応じて修繕を行う。
- (2) 成虫に効果の高い薬剤を主体とした薬剤防除を行う。
- (3) 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。
- (4) 悪天候などで作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- (5) 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。
- (6) 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。



イチゴにおけるハダニ類の防除対策

一部ほ場での多発を受け、令和7年12月22日付けで注意報 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/297317.pdf>) を発表しています。現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇するにつれて多発生する恐れがあります。特に3月以降は収穫盛期となり防除が遅れがちになるため、早めの防除を徹底しましょう。

- (1) 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉はポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (2) 薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- (3) 使用できる殺ダニ剤が少ない場合は気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、7日程度の間隔で複数回散布する。
- (4) 未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。
- (5) カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用しハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。
- (6) 薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないように使用する。農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守して農薬の安全使用に努める。

施設内でのトマトキバガの発生に注意しましょう！

野外でのフェロモントラップ調査における誘殺数は、令和4年の調査開始以来最も多く推移しており、これから気温の上昇とともに、野外での活動が活発になる可能性があります。施設内で発生すると、本虫による葉や果実への被害が発生するおそれがあるため、以下の防除対策を実施しましょう。

- (1) 施設栽培では、開口部に防虫ネット（目合い1mm以下）を設置し、侵入を防止する。定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れがないか点検し、破損部は速やかに修繕を行う。
- (2) 施設内をよく見回り、被害の早期発見に努める。病虫害防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>) にフェロモントラップへの誘殺状況を掲載しているので参考にする。トマトキバガ幼虫による被害葉は、ハモグリバエ幼虫による被害葉に似ているため、よく観察する。
- (3) 被害葉や被害果実は速やかに除去し、施設外に持ち出して処分する。被害残渣を野外に放置すると周囲に拡散するため、土中深くに埋設するか、ポリ袋等に1ヶ月以上密閉した後に処分する。
- (4) 本虫に登録のある農薬を散布する（令和7年9月22日付け注意報第4号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/290263.pdf>) を参照）。散布に当たっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。特に本虫が見られた施設では、密度を抑制し、拡散を防ぐため、薬剤防除は栽培終了2週間前まで継続する。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
冬春トマト	疫病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除員報告では、平年並(±)。 発病後は防除が困難なので、予防に重点を置く。前年に発生が多かったほ場では、定期的に薬剤散布を行う。
	葉かび病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除員報告では、平年並(±)。 発病葉は伝染源となるので、早めに除去し、処分する。
	すすかび病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除員報告では、平年並(±)。 発病葉は伝染源となるので、早めに除去し、処分する。
ウリ科野菜	つる枯病	並	防除員報告では、メロン、スイカで平年並(±)。 株元付近に発生が多いので、出来るだけ乾燥状態に保つ。
野菜類全般 (イチゴ除く)	アブラムシ類	並	巡回調査では、トマト、ナス、キュウリで平年並(±)。 防除員報告では、キュウリで平年比やや多～並、トマト、ナス、メロン、スイカ、キャベツ、ハクサイ、ホウレンソウで平年並、レタスで平年並～やや少(±)。
<p>【野菜病害虫の共通対策事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

Ⅳ その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室) (TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。



本予報は、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」